國學院大學学術情報リポジトリ

『楚辭補注』譯注稿(二十八)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: [國學院大學中國學會] メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000881

『楚辭補注』譯注稿（二十八）

楚辭卷第三
天問章句第三

〔本文〕

(87) 日安不到　　日安くにか到らざる。
(88) 燭龍何照　　燭龍(しょくりょう)何ぞ照らせる。
(89) 羲和之未揚　　羲和(ぎくわ)の未だ揚らざるに、
(90) 若華何光　　若華(じやくくわ)何ぞ光れる。
(91) 何所冬暖　　何(いづ)れの所か冬暖かなる。
(92) 何所夏寒　　何(いづ)れの所か夏寒き。
(93) 焉有石林　　焉くにか石林有る。
(94) 何獸能言　　何(いづ)れの獸か能く言ふ。
(95) 焉有虬龍　　焉くに虬龍(きうりょう)有りて、
(96) 負熊以遊　　熊を負ひて以て遊ぶ。

（97）雄虺九首　　雄虺九首、
（98）儵忽焉在　　儵忽として焉くにか在る。

〔通釋〕

太陽の照らさない国はどこにあるのか。燭龍は何故照らすのであろう。羲和がまだ日輪を御して昇らないさきに、若木の花はなぜ光るのであろうか。どこに冬暖かな国があるのか。どこに夏寒い国があるのか。どこに石の林があるのか。物を言うけだものは何というのか。どこに虬龍がいて、熊を背負って遊んでいるのか。九頭の雄蛇は、すばやくどこにいっているのか。

〔洪興祖補注〕

〔87〕〔88〕〈日安不到　燭龍何照〉

言天之西北、有幽冥無日之國。有龍銜燭而照之也。

〔補曰〕山海經云、鍾山之神、名曰燭陰。視爲晝、瞑爲夜。吹爲冬、呼爲夏。不飲不食、不喘不息。身長千里、人面蛇身、赤色。注曰、即燭龍也。淮南云、燭龍在鴈門北、蔽於委羽之山、不見日。其神人面龍身而無足。雪賦云、爛兮若燭龍銜曜照崑山。李善引山海經云、西北海之外、赤水之北、有章尾山。有神人面蛇身而赤。其瞑乃晦、其視乃明。是燭九陰、是謂燭龍。詩含神霧曰、天不足西北、無陰陽消息。故有龍銜火精、以照天門中者也。

〔訓讀文〕

言ふこころは、天の西北に幽冥にして日無きの國有り。龍有りて燭を銜みて、之を照らすなり。

〔補に曰く〕『山海經』（海外北經）に云ふ、「鍾山の神、名を燭陰と曰ふ、視れば晝と爲り、瞑れば夜と爲る。吹けば冬と爲り、呼べば夏と爲る。飲まず食はず、喘せず息せず。身の長千里、人面蛇身にして、赤色なり」と。注（郭璞）に曰く、「即ち燭龍なり」と。『淮南（子）』に云ふ、「燭龍は鴈門の北に在り、委羽の山を蔽ひ、日を見ず。其の神人面龍身にして足無し」と。『雪賦』に云ふ、「爛たること燭龍の曜を銜へて崑山を照らすが若し」と。李善『山海經』（大荒北經）を引きて云ふ、「西北海の外、赤水の北に、章尾山有り。神有り人面蛇身にして赤し。其の瞑するや乃ち晦となり、其の視るや乃ち明となる。是れ九陰を燭らす。是れを燭龍と謂ふ」と。『詩含神霧』に曰く、「天は西北に足らず、陰陽消息無し。故に龍有りて火精を銜み、以て天門中を照らす者なり」と。

〔語釋〕

○幽冥無日之國――日の照らさない国。○山海經云――『山海經』「海外西經」に同文あり。○燭龍――鍾山の神。燭陰ともいう。人面蛇身。眼を開けば昼、閉じれば夜となる龍神。『山海經』「海外北經」の郭璞注に、「燭龍也、是燭九陰、因名云。（燭龍なり、是れ九陰を燭らす、因りて名づくと云ふ。）」とある。○注曰――『山海經』「海外北經」に同文あり。○淮南云――『淮南子』「時則訓」に同文あり。○委羽――山の名。『淮南子』「墜形訓」に「委羽、北方山名也。（委羽は、北方の山名なり。）」とある。○雪賦云――『六臣注文選』「雪賦」に同文あり。○李善引山海經云――現行の『山海經』（袁珂『山海經校注』）「大荒北經」には「西北海之外、赤水之北、有章尾山、有神人面蛇身而赤。直目正乘、其瞑乃晦、其視乃明、不食不寢不息。風雨是謁。是燭九陰、是謂燭龍。（西北海の外、赤水の北に、章尾山有り。神有り人面蛇身にして赤し。直目正乘にして、其の瞑するや乃ち晦となり、其の視るや乃ち明となる。食はず寢ねず息せず。風雨是れ謁す。是れ九陰を燭らす。是れを燭龍と謂ふ）」とあり、「直目正乘」、「不食不寢不息。風雨是謁。」の句が加わっている。○九陰――陰気の盛んな所。郭璞に、「照九陰之幽陰也。（九陰の幽陰を照らすなり。）」とある。○詩含神霧――佚書。

〈89〉〈90〉〈羲和之未揚　若華何光〉

羲和、日御也。言日未出之時、若木何能有明赤之光華乎。和、釋文作龢。揚、一作陽。天對云、惟若之華、稟羲以耀。

〔補曰〕羲和・若木、已見騷經。

〔訓讀文〕

羲和は、日御なり。言ふこころは、日未だ出でざるの時、若木何ぞ能く明赤の光華有るや。和、『釋文』に龢に作る。揚、一に陽に作る。「天對」に云ふ、「惟れ若の華、羲を稟けて以て耀く」と。

〔補に曰く〕羲和・若木、已に「騷經」に見ゆ。

〔語釋〕

○羲和――日の馭者。本稿第四十輯『楚辭補注』譯注稿（七）を見よ。○若華――若木の花。○若木――古代の神話中にあらわれる神木の名。本稿第四十一輯『楚辭補注』譯注稿（八）を見よ。○釋文――『經典釋文』のこと。○和、釋文作龢――姜亮夫は『屈原賦校注』において、「和・龢經字通用也、然羲和古無作龢者。（和・龢は經字の通用なり、然れども羲和は古龢に作る者無し。）」と指摘する。○天對云――柳宗元「天對」に同文あり。

〈91〉〈92〉〈何所冬暖　何所夏寒〉

暖、温也。言天地之氣、何所有冬温而夏寒者乎。

〔補曰〕素問天不足西北、左寒而右凉。地不滿東南、右熱而左温。其故何也。岐伯曰、陰陽之氣、高下之理、太少之異也。注云、高下謂地形、太少謂陰陽之氣、盛衰之異。西方凉、北方寒、東方温、南方熱、氣化猶然矣。又曰、東南方陽也。陽者其精降

於下。故右熱而左温。西北方陰也。陰者其精奉於上。故左寒而右凉。是以地有高下。氣有温凉。高者氣寒、下者氣熱。注云、以氣候驗之、中原地形、所居者悉以居高則寒、處下則熱。中華之地、凡有高下之大者。東西南北各三分也。其一者、自漢蜀江南至海也。二者、自漢江北至平遥縣也。三者、自平遥北山北至蕃界北海也。故南分大熱、中分寒熱兼半、北分大寒。南北分外、寒熱尤極、大熱之分其寒微、大寒之分其熱微。又東西高下之別亦三矣。其一者、自汧源縣西至沙州。二者、自開封縣西至汧源縣。三者、自開封縣東至滄海也。故東分大温、中分温凉兼半、西分大凉。大温之分、其寒五分之二。大凉之分、其熱五分之二。温凉分外、温凉尤極、變爲大喧大寒也。約其大凡如此。然九分之地、寒極於東北、熱極於西南。中原地形、西北高、東南下、一爲地形高下、故寒熱不同。二則陰陽之氣有少有多。故表温凉之異爾。又曰、至高之地、冬氣常在。至下之地、春氣常在。注云、高山之巔、盛夏氷雪。汚下川澤、嚴冬草生。常在之義足明矣。淮南云、南至委火炎風之野、北方之極、有凍寒積氷、雪雹霜霰、漂潤羣水之野。又曰、南方有不死之草、北方有不釋之氷。

〔訓讀文〕

暖は温なり。言ふこころは、天地の氣、何れの所か冬温かにして夏寒き者有るや。

〔補に曰く〕『素問』に「天は西北に足らず、左寒くして右凉し。地は東南に滿たず、右熱くして左温かなり。其の故は何ぞや。岐伯曰く、陰陽の氣、高下の理、太少の異なればなり」と。注に云ふ、「高下は地形を謂ひ、太少は陰陽の氣、盛衰の異なるを謂ふ。西方は凉、北方は寒、東方は温、南方は熱きなり。氣の化すること猶ほ然り」と。又曰く、「東南方は陽なり。陽なる者は、其の精の下に降る。故に右は熱くして左は温なり。西北方は陰なり。陰なる者は、其の精の上を奉ず。故に左寒くして右凉し。是を以て地に高下有り。氣に温凉有り。高ければ氣寒く、下ければ氣熱し」と。注に云ふ、「氣候を以て之を驗するに、中原の地形、居る所の者悉く居の高きを以てすれば則ち寒く、下きに處れば則ち熱し。中華の地、凡そ高下の大なる者有り。東西南北、各おの三分するなり。其の一は、漢蜀江南自り海に至るなり。二は、漢江の北自り平遥縣に至るなり。三は、平遥北山の北自り蕃界北海に至るなり。故に南に大熱を分し、中に寒熱兼半を分し、北に大寒を分す。南

北の分外、寒熱尤も極め、大熱は之れ其の寒微を分し、大寒は之れ其の熱微を分す。又東西高下の別も亦た三あり。其の一は、汧源縣の西自り沙州に至る。二は、開封縣の西自り汧源縣に至る。三は、開封縣の東自り滄海に至るなり。故に東に大温を分し、中に温涼兼半を分し、西に大涼を分す。大温の分は、其の寒五分の二なり。大涼の分は其の熱五分の二なり。温涼の分外、温涼尤も極め、變じて大喧大寒と爲るなり。約其の大凡此くの如し。然れども九分の地、寒は東北に極まり、熱は西南に極まる。中原の地形、西北高くして東南下く、一は地形の高下と爲り、故に寒熱同じからず。二は則ち陰陽の氣、少き有り多き有り。故に温涼の異を表するのみ」と。又曰く「至高の地、冬氣常在り。至下の地、春氣常在り」と。注に云ふ「高山の巔、盛夏にも氷雪あり。川澤を汚下し、嚴冬にも草生ず。常在の義、明らかにするに足る」と。『淮南』（「時則訓」）に云ふ、「南のかた委火炎風の野に至り、北方の極、凍寒積氷、雪雹霜霰有りて、羣水の野に漂潤す」と。又（『淮南子』「墜形訓」）曰く、「南方に不死の草有り、北方に不釋の氷有り」と。

〔語釋〕

○素問――『黄帝内經素問』のこと。○素問――『黄帝内經素問』「五常政大論」に同文あり。○注云――『黄帝内經素問』「五常政大論」に「高下謂地形…（省略あり）…氣化猶然矣。（高下は地形を謂ひ…（省略あり）…氣の化すること猶ほ然り）」とある。○又曰、東南方陽也～下者気熱。――『黄帝素問』「五常政大論」に同文あり。○注云、以氣候驗之～故表温涼之異爾。――『黄帝素問』「五常政大論」に「以氣候驗之…（省略あり）…故表温涼之異爾。（氣候を以て之を驗するに…（省略あり）…故に温涼の異を表するのみ。）」とある。○又曰、至高之地～春氣常在。――『黄帝内經素問』「五常政大論」に同文あり。○注云、高山之巔～常在之義足明矣。――『黄帝内經素問』「五常政大論」に同文あり。○岐伯――黄帝の臣にして名医。○淮南云――『淮南子』「時則訓」に「南至委火炎風之野…（省略あり）…漂潤羣水之野。（南のかた委火炎風の野に至り…（省略あり）…羣水の野に漂潤す）」とある。○又曰――『淮南子』「墜形訓」に同文あり。

（93）（94）〈焉有石林　何獸能言〉

言天下何所有石木之林、林中有獸能言語者乎。禮記曰、猩猩能言、不離禽獸也。

〔補曰〕石林與能言之獸、各指一物、非必林中有此獸也。呉都賦云、雖有石林之岸崿、請攘臂而靡之。雖有雄虺之、九首將抗足而跐之。注引天問云、焉有石林。此本南方楚圖畫、而屈原難問之、於義則石林當在南也。按天問所言、不獨南方之物。但呉都賦以石林與雄虺同稱、則當在南耳。天對云、石胡不林、往視西極。按淮南云、西方之極、石城金室。未見石林所出也。爾雅曰、猩猩小而好啼。山海經鵲山有獸、狀如禺。捷類獼猴、被髪垂地、名曰猩猩。又曰、猩猩知人名、其爲獸如豕而人面。

〔訓讀文〕

言ふこころは、天下何れの所にか石木の林有る、林中の獸能く言語する者有るか。『禮記』（曲禮上）に曰く、「猩猩能く言ふも、禽獸を離れざるなり」と。

〔補に曰く〕石林と能く言ふの獸と、各おの一物を指し、必らずしも林中に此の獸有るに非ざるなり。「呉都賦」に云ふ、「石林の岸崿有りと雖も、請ふ臂を攘ひて之を靡かんことを。雄虺の九首有りと雖も、將に足を抗げて之を跐まんとす」と。注（劉逵）に「天問」を引きて云ふ、「焉くにか石林有る。此れ本と南方楚の圖畫にして屈原之を問ふこと難し。義に於いて則ち石林當に南に在るべきなり」と。按ずるに「天問」に言ふ所、獨り南方の物のみならず。但だ「呉都賦」石林と雄虺とを以て同じく稱すれば、則ち當に南に在るべきのみ。「天對」に云ふ「石胡ぞ林ならざらん。往きて西極を視る」と。按ずるに、『淮南』（「時則訓」）に云ふ、「西方の極、石城金室あり」と。未だ石林の出づる所を見ざるなり。『爾雅』に曰く、「猩猩は小にして好く啼く」と。『山海經』（「南山經」）に「鵲山に獸有り、狀は禺の如し。捷きこと獼猴に類し、被髪地に垂る、名づけて猩猩と曰ふ」と。又（『山海經』「海内南經」）曰く、「猩猩は人の名を知り、其れ獸爲ること豕の如くして人面なり」と。

〈語釋〉

○石林――石の林。石が林立しているところ。○禮記曰――『禮記』「曲禮上」に同文あり。○呉都賦曰――『六臣注文選』「呉都賦」に同文あり。○注引天問云――『六臣注文選』「呉都賦」に「烏有石林。此本南方楚圖畫、而屈原難問之、於義則石林當在南也。（烏くにか石林有る。此れ本と南方楚の圖畫にして屈原之を問ふこと難し。義に於いて則ち石林當に南に在るべきなり。）」とある。○爾雅曰――『爾雅』「釋鳥」に同文あり。○山海經、鵲山有獸――『山海經』に同文を確認できず。○又曰――『山海經』「海内南經」に同文あり。○被髪――頭髪を振り乱す。髪を結ばずに自然のままにしておくこと。又、其の髪。ここでは、振り乱した髪。『史記』「屈原賈生列傳」に「屈原至於江濱、被髪行吟澤畔。（屈原江濱に至り、被髪して澤畔に行吟す。）」とある。

〈95〉〈96〉〈焉有虬龍　負熊以遊〉

有角曰龍、無角曰虬。言寧有無角之龍、負熊獸以遊戯者乎。

〔補曰〕虬、見騷經。熊形類大豕、而性輕捷、好攀縁上高木、見人則顛倒自投地而下。天對云、有虬蜲蛇、不角不鱗。嬉夫玄熊、相待以神。

〈訓讀文〉

角有るを龍と曰ひ、角無きを虬と曰ふ。言ふこころは、寧くんぞ角無きの龍、熊獸を負ひて以て遊戯する者有るか。

〔補に曰く〕虬は、「騷經」に見ゆ。熊の形は大豕の類くにして、性輕捷にして、好んで攀縁して高木に上り、人を見れば則ち顛倒し自ら地に投じて下る。「天對」に云ふ、「虬有りて蜲蛇たり。角あらず鱗あらず。夫の玄熊を嬉ばしめて相待ちて以て神なり」と。

〔語釋〕

○虬龍――みづち。本稿第四十輯『楚辭補注』譯注稿（七）を見よ。『楚辭集注』では「龍虬」に作る。○輕捷――すばやいこと。敏捷。○攀縁――よじ登る。○天對云――柳宗元「天對」に同文あり。○蜲蛇――うねり行くさま。斜に行くさま。

〔97〕〔98〕〈雄虺九首　儵忽焉在〉

虺、蛇別名也。儵忽、電光也。言有雄虺、一身九頭、速及電光。皆何所在乎。一無速字。

〔補曰〕虺、許偉切。國語云、爲虺弗摧、爲蛇將若何。虺、小蛇也。然爾雅云、蝮虺博三寸、首大如擘。則虺亦有大者、其類不一。招魂、南方曰、雄虺九首、往来儵忽。儵忽、疾急貌。天對曰、儵忽之居、帝南北海。注云、儵忽、在莊子甚明。王逸以爲電、非也。按莊子云、南海之帝爲儵、北海之帝爲忽。乃寓言爾。不當引以爲證。

〔訓讀文〕

虺は、蛇の別名なり。儵忽は、電光なり。言ふこころは、雄虺有り、一身九頭にして、速きこと電光に及ぶ。皆何れの所に在るか。一に速の字無し。

〔補に曰く〕「虺は、許偉の切。『國語』に云ふ、「虺摧けずと爲し、蛇將に若何と爲す」と。虺は、小蛇なり。然るに『爾雅』に云ふ、「蝮虺は博さ三寸、首の大きさ擘の如し」と。則ち虺も亦た大なる者有り、其の類一ならず。「招魂」の南方に曰く「雄虺九首にして、往来儵忽たり」と。儵忽は、疾急の貌。「天對」に曰く、「儵忽の居、南北海に帝たり」と。注に云ふ、「儵忽は、『莊子』に在りて甚だ明らかなり。王逸以て電と爲すは、非なり」と。按ずるに『莊子』に云ふ、「南海の帝儵と爲り、北海の帝忽と爲る」と。乃ち寓言なるのみ。當に引きて以て證と爲すべからず。

〔語釋〕

○雄虺――雄蛇のこと。○儵忽――疾急の貌。柳宗元が「天對」の中で『莊子』の「儵は南海の帝、忽は北海の帝」に因るとするのは、寓言にすぎないと洪興祖はいう。○國語云――『國語』「呉語」に同文あり。○爾雅云――『爾雅』「釋木」に同文あり。○招魂――「招魂」に「南方（…（省略あり）…）雄虺九首、往来儵忽。（南方には…（省略あり）…雄虺九首にして、往来儵忽たり。）」とある。○天對曰――柳宗元「天對」に同文あり。○注云――柳宗元「天對」に同文あり。○莊子云――『莊子』「應帝王」に同文あり。

〔本文〕

(99) 何所不死　何の所か死せざる、
(100) 長人何守　長人何をか守る。
(101) 靡萍九衢　靡萍九衢なる、
(102) 枲華安居　枲華は安くにか居る。
(103) 一蛇吞象　一蛇 象を吞む、
(104) 厥大何如　厥の大いさ何如。
(105) 黑水玄趾　黑水と玄趾と、
(106) 三危安在　三危とは安くに在りや。
(107) 延年不死　年を延べて死せず、
(108) 壽何所止　壽は何くに止まる所ぞ。
(109) 鯪魚何所　鯪魚は何れの所ぞ、

（110）甀堆焉處　甀堆（きたい）は焉れの所ぞ。

〔通釋〕

どこに不死の国はあるのか。長人は何を守っているのか。枝のたくさん分かれ出た靡蕤や、皋華は、どこにあるのだろうか。ある蛇は象を呑むというが、その大きさはどれほどか。黒水や玄趾はどこにあるのか。長生きして死なないというが、寿命はどのくらいで止まるのだろうか。鯪魚はどこにいるのか。甀堆はどこにいるのか。

〔洪興祖補注〕

（99）（100）〈何所不死　長人何守〉

括地象曰、有不死之國、長人、長狄。春秋云、防風氏也、禹會諸侯、防風氏後至、于是使守封嵎之山也。一云、何所不老。〔補曰〕山海經、不死民在交脛國東、其人黑色、壽不死。注云、圓丘上有不死樹、食之乃壽、有赤水、飲之不老。又大荒之山、日月所入、有人三面、一臂奇右、其人不死。淮南曰、西方之極、石城金室、飲氣之民、不死之野。國語、仲尼曰、昔禹致群神於會稽之山、防風氏後至、禹殺而戮之、其骨節專車。又曰、山川之守、足以綱紀天下者、其守爲神。客曰、防風氏何守也。仲尼曰、汪芒氏之君、守封・嵎之山者也。爲漆姓、在虞・夏・商爲汪芒氏、於周爲長狄、今爲大人。客曰、人長之極幾何。仲尼曰、長者不過十之、數之極也。注云、十之三丈、則防風氏也。今湖州武康縣東有防風山、山東二百歩有禹山、防風廟在封禹二山之間。穀梁、文公十一年、叔孫、得臣、敗狄于鹹。長狄也。射其目、身横九畝。

〔訓讀文〕

『（河圖）括地象』に曰く、「不死の國有り、長人、長狄なり」と。『春秋』に云ふ、「防風氏なり。禹、諸侯を會せしとき、防風氏後れて至る。是に于て封嵎の山を守らしむ」と。一に云ふ、「何所不老」と。

〔補に曰く〕『山海經』（海外南經）に、「不死の民、交脛國の東に在り、其の人黒色、壽にして死せず」と。注（郭璞）に云ふ、「圓丘の山有り、上に不死の樹有り。之を食へば乃ち壽なり。亦た赤水有り、之を飲めば老いず」と。又、「大荒の山、日月の入る所、人有り三面、一臂奇右、其の人死せず」と。『淮南』（時則訓）に曰く、「西方の極自り流砂・沈羽を絶ぎ、石城金室、飲気の民、不死の野」と。『国語』（魯語下）に、「仲尼曰く、「昔 禹 群神を會稽の山に致せしとき、防風氏後れて至る。禹 殺して之を戮す。其の骨節 車を専らにす」と。又曰く、「山川の守、以て天下を綱紀するに足る者、其の守を神を爲す」と。客曰く、「防風氏は何の守ぞや」と。仲尼曰く、「汪芒氏の君なり。封・嵎の山を守りし者なり。漆姓爲り。虞・夏・商に在りては汪芒氏と爲し、周に於ては長狄と爲し、今は大人と爲す」と。客曰く、「人の長の極は幾何ぞ」と。仲尼曰く、「長（たけたか）き者も之を十にするに過ぎず。數の極なり」と」と。注に云ふ、「十の三丈は則ち防風氏なり。今、湖州武康縣の東に防風山有り。山の東二百歩に禹山有り。防風廟は封禹二山の間に在り」と。『穀梁』文公十一年に、「叔孫、臣を得、狄を鹹に敗る。長狄なり。其の目を射るに、身九畝に横にす」と。

〔語釋〕

○括地象曰――佚文。○長人――古代の蛮夷の国の名。○長狄――古の北狄の一種。身長が百尺あるという。『春秋公羊電』「文公十一年」に「冬十月甲午、叔孫得臣敗狄于鹹。狄者何。長狄也。（冬十月甲午、叔孫得臣、狄を鹹に敗る。狄は何ぞ。長狄なり。）」とある。○春秋云――ここの一節は『春秋』の経文及び「三伝」には見られない。しかし、『史記』「孔子世家」に「仲尼曰、「禹致群神於會稽山、防風氏後至、禹殺而戮之、其節專車、此爲大矣。（仲尼曰く、「禹 群神を會稽山に致ししとき、防風氏

後れて至り、禹殺して之を戮せり、其の節車を専らにせり、此を大なりと爲す。))」とある。○防風氏――夏の諸侯。禹が天下を平らげ諸侯を会稽に会した時に後れて来たため禹に誅せらる。○封嵎――封・嵎は、どちらも山の名。今、封山・嵎山の二山に分ち、封山は浙江省武康縣の東、嵎山は縣の東南。『説文解字』に「嵎、封嵎之山、在吳楚之閒、汪芒之國。（嵎、封嵎の山、吳楚の閒、汪芒の國に在り。）」とある。○山海經――『山海經』「海外南經」に「交脛國在其東、其爲人交脛。一曰在穿匈東。不死民在其東、其為人黑色、壽、不死。一曰在穿匈國東。（交脛國は其の東に在り、其の人と爲りは脛を交ふ。一に穿匈の東に在りと曰ふ。不死の民は其の東に在り、其の人と爲りは黑色、壽にして、不死なり。一に穿匈國の東に在りと曰ふ。）」とある。○交脛國――脛がまがって相交わった人の棲む国。○一臂――片方のひじ。○淮南曰――『淮南子』「時則訓」に「西方之極、自昆侖絕流沙・沈羽、西至三危之國、石城金室飲氣之民、不死之野。（西方の極は、昆侖自り流沙・沈羽を絕ぎ、西のかた三危の國、石城金室飲氣の民、不死の野に至る。）」とある。○國語…『國語』「魯語下」に「仲尼曰、「丘聞之、昔禹致群神于會稽之山、防風氏後至、禹殺而戮之、其骨節專車。此爲大矣。」客曰、「敢問誰守爲神。」仲尼曰、「山川之靈、足以紀綱天下者、其守爲神、社稷之守者、爲公侯。皆屬于王者。」客曰、「防風何守也。」仲尼曰、「汪芒氏之君也、守封嵎之山者也、爲漆姓。在虞・夏・商爲汪芒氏、于周爲長狄、今爲大人。」客曰、「人長之極幾何。」仲尼曰、「僬僥氏長三尺、短之至也。長者不過十之、數之極也。（仲尼曰、「丘之を聞く、昔禹群神を會稽の山に致ししとき、防風氏後れて至り、禹殺して之を戮す、其の骨節は車を專らにす。此を大なりと爲す」と。客曰く、「敢て問ふ誰の守をか神と爲す」と。仲尼曰く、「山川の靈、以て天下を紀綱するに足る者は、其の守を神と爲す、社稷の守る者を、公侯と爲す。皆王者に屬す」と。客曰く、「防風は何の守ぞ」仲尼曰く、「汪芒氏の君にして、封嵎の山を守る者なり、漆姓爲り。虞・夏・商に在りては汪芒氏と爲し、周に于ては長狄と爲し、今は大人と爲す」と。客曰く、「人の長の極は幾何ぞ」と仲尼曰く、「僬僥（しょうぎょう）氏の長は三尺、短の至なり。長き者も之を十にするに過ぎざるは、數の極なればなり」と。)」とある。○汪芒――古の国名。『史記』「孔子世家」では「汪罔」に作る。○穀梁、文公十一年――『春秋穀梁傳』「文公十一年」に、「叔孫得臣敗狄於鹹。不言帥師而言敗、何也。直敗一人之辭也。一人而曰敗、何也。以眾焉言之也。傳曰、長狄也、弟兄三人、佚宕中國、瓦石不能害。叔孫得臣、最善射者也。射其目、身橫九畝。（叔孫 臣を得て狄を鹹に敗る。師を帥ゐると言はずして敗ると言ふは、何ぞや。直だ一人に敗る

るの辭なり。一人にして敗るると曰ふは、何ぞや。焉を眾にするを以て之を言ふなり。傳に曰く、長狄なり、弟兄三人、中國を佚害し、瓦石にして害する能はず。叔孫得臣は、最も射を善くする者なり。其の目を射るに、身九畝に横にす。)」とある。

(101)(102)〈靡萍九衢　枲華安居〉

九交道曰衢。言寧有萍草、生於水上無根、乃蔓衍於九交之道、又有枲麻垂草華榮、何所有此物乎。萍、一作荓。

〔補曰〕此謂靡萍與枲華皆安在也。爾雅萍萍注云、水中浮萍也。山海經曰、宣山上有桑焉、其枝四衢。(四原作曰、據山海經改。)注云、枝交互四出。又少室之山有木、名帝休、其枝五衢。注云、言樹枝交錯、相重五出、有象路衢。天對云、有萍九岐、厥圖以詭。注云、衢、歧也。逸以爲生九衢中、恐謬。魏都賦云、尋靡萍於中逵。蓋用逸說也。李善云、靡、蔓也。枲、相里切。爾雅、有枲麻、麻有子曰枲。天對云、浮山孰産。赤華伊枲。引山海經、浮山有草焉、其葉如麻。赤華、即枲華也。

〔訓讀文〕

九交道を衢を曰ふ。言ふこころは、寧ぞ萍草水上に生じて根無く、乃ち九交の道に蔓衍すること有る。又、枲麻有りて草の華榮を垂る。何れの所にか此の物有るか。萍は、荓(へい)に作る。

〔補に曰く〕此れ靡萍と枲華皆安くにか在ると謂ふなり。『爾雅』(釋草)の萍萍に注に云ふ、「水中の浮萍なり」と。『山海經』(中山經)に曰く、「宣山の上に桑有り、其の枝四衢(四は原と曰に作る。『山海經』に據りて改む。)」と。注(郭璞)に云ふ、「枝交互して四に出づ」と。又(中山經)、「少室の山に木有り、名は帝休、其の枝五衢」と。注に言ふ、「言ふこころは樹の枝交錯し相重なりて五に出づ。路衢に象る有り」と。「天對」に云ふ、「萍の九岐有り、厥の圖以て詭れり」と。注に言ふ、「衢は、岐なり。逸以て九衢の中に生ずと爲すは、恐らくは謬れり」と。「魏都賦」(『文選』巻八)に云ふ、「靡萍を中逵に尋ぬ」と。蓋し逸說を用ひしならん。李善云ふ、「靡は、蔓なり」と。枲は、相里の切。『爾雅』(釋草)に、「枲麻有り、麻に子有るを枲と曰ふ」と。天對に云ふ、「浮山孰か産する。赤華は伊れ枲なる」と。「『山海經』(西山經)に、浮山に草有り、其の

葉麻の如し」を引く。赤華は、即ち枲華なり。

〈語釋〉

○靡薐――ながれ漂う浮草。ここが初出か。○枲華――からむし。大麻の、実の出来ないもの。茎の皮から繊維をとって織物の原料とする。ここが初出か。○枲麻――あさ。また、それから採った繊維。枲華からとれた繊維のことであろう。○爾雅萍薐注云――『爾雅』「釋草」に同文あり。○山海經曰――『山海經』「中山經」に「又東五十五里、曰宣山。（中略）其上有桑焉、大五十尺、其枝四衢。（又東五十五里に、宣山と曰ふ。（中略）其の上に桑有り、大なること五十尺、其の枝四衢）」とある。郭璞注に「言枝交互四出。（枝交互して四に出づと言ふ）」とある。○又――『山海經』「中山經」に「又東五十里、曰少室之山、百草木成困。其上有木焉、其名曰帝休、葉狀如楊、其枝五衢、黃華黑實、服者不怒。（又東五十里に、少室の山と曰ふ、百の草木困を成す。其の上に木有り、其の名を帝休と曰ふ、葉の狀は楊の如し、其の枝五衢、黃の華黑の實、服する者は怒らず）」とある。○天對云――柳宗元「天對」に同文あり。○注言――柳宗元「天對」では、「逸」を「王逸」に作る。○魏都賦云――『六臣注文選』「魏都賦」に同文あり。李善注もまた同文あり。○天對云――柳宗元「天對」に同文あり。「引山海經」以降はその注釈である。

（103）（104）〈一蛇呑象　厥大何如〉

山海經云、南方有靈蛇、呑象。三年然後出其骨。一或作靈、大或作骨。

〔補曰〕山海經、南海内有巴蛇、身長百尋、其色青黃赤黑、食象、三歲而出其骨、君子服之、無心腹疾、在犀牛西也。注云、今南方蚺蛇、亦呑鹿、消盡、乃自絞於樹。腹中骨皆穿鱗甲間出、亦此類也。楊大年云、逸注楚詞、多不原所出。或引淮南子、而劉安所引、亦本山海經。其注巴蛇事、文句頗謬戾、乃知、逸憑它書、不親見山海經也。吳都賦云、屠巴蛇、出象骼。

〔訓讀文〕

『山海經』（海内南經）に云ふ、「南方に靈蛇有り、象を呑む。三年にして然る後に其の骨を出だす」と。一は或いは靈に作り、大は或いは骨に作る。

〔補に曰く〕『山海經』（海内南經）に、「南海の内に巴蛇有り、身の長百尋、其の色青黄赤黒、象を食ひ、三歳にして其の骨を出だす。君子之を服さば、心腹の疾無し、犀牛の西に在るなり」と。注（郭璞）に云ふ、「今南方の蚺蛇（ぜんだ）、亦鹿を呑み、消盡すれば、乃ち自ら樹に絞す。腹中の骨は皆鱗甲の間を穿ちて出づ、亦此の類なり」と。楊大年云ふ、「逸『楚詞』に注せしとき、多くは出づる所を原ねず。或いは『淮南子』を引き、而して劉安引く所、亦た『山海經』に本づく。其の巴蛇の事を注するに、文句頗る謬戻あり、乃ち知る、逸 它の書に憑りて、親らは『山海經』を見ざるなり。吳都賦に云ふ、「巴蛇を屠り、象骼を出だす」と」と。

〔語釋〕

○山海經云――『山海經』「海内南經」に「巴蛇食象、三歳而出其骨、君子服之無心腹之疾。其爲蛇青黄赤黒。一曰黒蛇青首、在犀牛西。（巴蛇は象を食ふ、三歳にして其の骨を出す、君子之を服さば心腹の疾無し。其の蛇と爲りは青黄赤黒なり。一に黒蛇青首、犀牛の西に在り）」とある。「其爲蛇青黄赤黒」とは、蛇の文様が色鮮やかなこと。○山海經――『山海經』「海内南經」に前と同じ文あり。○注云――前の『山海經』「海内南經」の文の郭璞の注に、「今南方蚺蛇、亦呑鹿、鹿已爛、自絞於樹。腹中骨皆穿鱗甲間出、亦此類也。（今南方の蚺蛇、亦鹿を呑む、鹿已に爛れ、自ら樹に絞す。腹中の骨は皆鱗甲の間を穿ちて出づ、亦此の類なり）」とある。○楊大年云――「楊大年」は宋の楊億のこと。大年は字。ここの文章は出典不明。○吳都賦云――『六臣注文選』「吳都賦」に同文あり。

(105)(106)〈黒水玄趾　三危安在〉

玄趾・三危、皆山名也。在西方。黒水出崑崙山也。趾、一作沚。

〔補曰〕言黒水・玄趾・三危、皆安在也。書曰、道黒水至于三危、入于南海。張揖云、三危山在鳥鼠西、黒水出其南。天對云、黒水淫淫、窮于不姜。玄趾則北、三危則南。西京賦云、昆明靈沼、黒水玄阯。言昆明靈沼、取象於黒水・玄阯也。李善云、黒水・玄阯、謂昆明靈沼之水沚。非是。

〔訓讀文〕

玄趾・三危は、皆山名なり。西方に在り。黒水は崑崙山より出づるなり。趾は、一に沚に作る。

〔補に曰く〕言ふこころは、黒水・玄趾・三危は、皆安くに在りや。『書』（禹貢）に曰く、「黒水を道きて三危に至り、南海に入る」と。張揖云ふ、「三危山は鳥鼠の西に在りて、黒水其の南に出づ」と。天對に云ふ、「黒水淫淫として、不姜を窮む。玄趾は則ち北、三危は則ち南」と。西京賦に云ふ、「昆明の靈沼、黒水の玄阯」と。言ふこころは、昆明の靈沼、象を黒水・玄阯に取るなり。李善云ふ、「黒水・玄阯は、昆明の靈沼の水沚を謂ふ」と。是に非ず。

〔語釋〕

○書曰――『書經』「禹貢」に同文あり。○張揖――後漢、清河の人。字は稚讓。官は太和中の博士。その著、『埤蒼』・『古今字詁』は既に佚し、『廣雅』が存している。ここの文章は佚文と思われる。○天對云――柳宗元「天對」に同文あり。○淫淫――流れるさま。○不姜――河の名。『山海經』「大荒南經」に「大荒之中、有不姜之山、黒水窮焉。（大荒の中に、不姜の山有り、黒水窮む。）」とある。○西京賦云――『六臣注文選』「西京賦」に「廼有昆明靈沼、黒水玄阯。（廼ち昆明の靈沼、黒水の玄阯有り。）」とある。○李善云――前の「西京賦」の李善の注に「黒水玄阯、謂昆明靈沼之水沚也。（黒水玄阯、

昆明の靈沼の水沚を謂ふなり。)」とある。○沚――小さい洲。『爾雅』「釋水」に「小渚曰沚。(小渚を沚と曰ふ。)」とある。

(107)(108)〈延年不死　壽何所止〉

言仙人稟命不死、其壽獨何所窮止也。

〔補曰〕素問云、上古有眞人、壽敝天地無有終時。中古之時、有至人者、益其壽命而強者也、亦歸於眞人。其次有聖人者、形體不敝、精神不散、亦可以百數。

〔訓讀文〕

言ふこころは、仙人命を稟けて死せず、其の壽獨り何の窮止する所ぞや。

〔補に曰く〕『素問』に云ふ、「上古に眞人有り、壽 天地を敝ふも終る時有ること無し。中古の時、至人なる者有り、其の壽命を益して強き者なり、亦た眞人に歸す。其の次に聖人なる者有り、形體敝せず、精神散ぜず、亦た百を以て數ふべし」と。

〔語釋〕

○素問云――『黄帝内經素問』「上古天眞論篇第一」に「黄帝曰、余聞、上古有眞人者、(中略)故能壽敝天地無有終時。此其道生。中古之時有至人者、(中略)此蓋益其壽命而強者也。亦歸於眞人。其次有聖人者、(中略)形體不敝、精神不散、亦可以百數。(黄帝曰く、余聞く、上古に眞人なる者有り、(中略)故に能く壽 天地を敝ふも終る時有ること無し。此れ其れ生を道く。中古の時至人なる者有り、(中略)此れ蓋し其の寿命を益して強き者なり。亦た眞人に歸す。其の次に聖人なる者有り、(中略)形體敝せず、精神散ぜず、亦た百を以て數ふべし。)」とある。

(109)(110)〈鯪魚何所　魋堆焉處〉

鯪魚、鯉也。一云、鯪魚、陵鯉也。有四足、出南方。魋堆、奇獸也。鯪、一作陵。所、一作居。魋、一作魁。

〔補曰〕鯪、音陵。山海經、西海中、近列姑射山、有陵魚、人面人手魚身、見則風濤起。天對云、鯪魚人貌、邇列姑射、是也。陶隱居云、鯪鯉形似鼉而短小、又似鯉魚、有四足。吳都賦云、陵鯉若獸。注引陵魚曷止、與逸說同。魋、音祈。堆、多回切。山海經云、北號山有鳥、狀如雞而白首、鼠足、名曰魋雀。食人。天對云、魋雀峙北號、惟人是食。注云、堆、當爲雀。王逸注誤。按字書、鴟、音堆、雀屬也。則魋堆即魋雀也。

〔訓讀文〕

鯪魚は、鯉なり。一に云ふ、鯪魚は、陵鯉なり。四足有り、南方に出づ。魋堆は、奇獸なり。鯪は、一に陵に作る。所は、一に居に作る。魋は、一に魁に作る。

〔補曰〕鯪、音は陵。『山海經』（海内北經）に、「西海の中、列姑射の山に近く、陵魚有り、人面人手魚身なり、見はるれば則ち風濤起る」と。天對に云ふ、「鯪魚は人の貌、列姑射に邇し」とは、是れなり。陶隱居云ふ、「鯪鯉の形は鼉（だ）に似て短小なり、又鯉魚に似て、四足有り」と。吳都賦に云ふ、「陵鯉は獸の若し」と。注に「陵魚曷止」を引く、逸說と同じ。魋、音は祈。堆は、多回の切。『山海經』（東山經）に云ふ、「北號の山に鳥有り、狀雞の如くにして白首、鼠の足、名づけて魋雀と曰ふ。人を食ふ」と。天對に云ふ、「魋雀　北號に峙ちて、惟だ人のみ是れ食ふ」と。注に云ふ、「堆は、當に雀に爲るべし」と。王逸注は誤れり。『字書』を按ずるに、鴟、音は堆、雀の屬なり。則ち魋堆は即ち魋雀なり。

〔語釋〕

○鯪魚――せんざんこうのこと。○魋堆――奇獸の名。「天問」が初出か。○山海經――『山海經』「海内北經」に「列姑射

在海河洲中。（中略）陵魚人面、手足、魚身、在海中。（列姑射は海の河洲の中に在り。（中略）陵魚は人面、手足あり、魚の身、海中に在り。）」とある。○列姑射――仙人の住んでいるという山。『列子』「黄帝第二」に「列姑射山在海河洲中、山上有神人焉、吸風飲露、不食五穀。（列姑射山は海河の洲中に在り、山上に神人有り、風を吸ひ露を飲み、五穀を食はず。）」とある。○風濤――風と大波。風が吹いて波がたつこと。○天對云――柳宗元「天對」に同文あり。○陶隱居云――「陶隱居」は梁の陶弘景のこと。ここの文章は出典不明。○鼉――わにの一種。○吳都賦云――『六臣注文選』「吳都賦」に同文あり。○山海經云――『山海經』「東山經」に「北號之山、臨于北海。（中略）有鳥焉、其狀如鷄而白首、鼠足而虎爪、其名曰魵雀、亦食人。（北號の山は、北海に臨む。（中略）鳥有り、其の狀は鷄の如くにして白き首、鼠の足にして虎の爪、其の名を魵雀と曰ふ、亦た人を食ふ。）」とある。○天對云――柳宗元「天對」及びその注釈に同文あり。○按字書――出典不明。

※「『楚辭補注』譯注稿（二十九）」に續く。

（本輯擔當者…齋藤成治・前園悠太）